



Title	1プフェニツヒから1,000,000,000,000マルクまで : ドイツ紙幣コレクション
Author(s)	豊田, 裕昭
Citation	図書館雑誌, 97(5): 302-303
Issue Date	2003-05
Type	Journal Article
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10086/15135
Right	



図書館お宝紹介!

1プフェニツヒから

1,000,000,000,000マルクまで:

ドイツ紙幣コレクション

第21回
一橋大学附属図書館

豊田裕昭

1 はじめに

ご存知のように一橋大学は商・経・法・社の社会科学系4学部の国立大学ではありますが、その歴史は古く1875(明治8)年森有禮による商法講習所開学以来128年という伝統を誇っています。

附属図書館も農商務省から文部省の直轄となった東京商業学校時代の1885(明治18)年には、既に書庫をあわせ持つ約34坪の図書室と3名の図書掛員が配置され、以降118年の歴史を有していますので、稀覯書といわれるものや貴重なコレクションなどは数あり、博物館などから出展依頼がくるなど、お宝といわれるものはさまざまあるのですが、今回はその中からの一つ「ドイツ紙幣コレクション」をご紹介します。

2 ドイツ紙幣コレクションとは

これは、一橋大学の元学長であり、名誉教授であった井藤半彌博士(1894~1974)が、1922年11月から1925年3月までのベルリン留学中に蒐集されたドイツ紙幣等約450枚のコレクションです。

この時期はちょうど、第一次世界大戦後の1922年から1923年にドイツを襲った天文学的な超インフレーションの時期にあたり、コレクションの内容は、その乱発が繰り返された1マルクから1兆マルクまでの紙幣や、流通紙幣として追加的な役割を果たした200億マルク証券までの国有鉄道証券(Reichsbahn Schein)、1922年の500マルク証券から、1923年の巨額化した200億マルク証券が見られるベルリンやドレスデン、ハンブルクなどの都市金庫証券(Stadtkassen Schein)、貸付金庫証券(Darlehenskassen Schein)などが170枚、マルク以下の小額紙幣欠乏への対応から、各地の自治体で独自にプフェニツヒ(Pfennig)単位で発行され



▲高額ドイツマルク紙幣

た緊急貨幣類が、1プフェニツヒから100プフェニツヒ(=1マルク)まで280枚ほどあります。

これらのコレクションは大小2冊のアルバムに上部1か所をテープで貼り、裏面も見られるように工夫されて納められています。

アルバムの最初に井藤半彌先生直筆で「前半は帝国銀行券であって、1922年、23年ベルリンで蒐集したもの。1兆マルク、1 Rentenマルクを超えるものを除き網羅的に集まってゐる。後半は緊急貨幣(Notgeld)であって、地方団体、會社等が通貨不足を補ふために発行したもの。緊急貨幣はすべてベルリン市内の商店で購入した。」と記されています。

1922年ごろまでの当時高額であった紙幣はサイズも大きく、特に1922年発行の1万マルクは、縦12.3cm、横21cmとかなり大きいもので、肖像も描かれ紙幣らしいものです。しかし、1923年になると紙幣も一変し、額面にMillionenやMilliardeが現われ、いわゆる、数千万マルク、数億マルクの登場であり、見た目も触感もお札というよ



▲ドイツ各自治体発行プフェニツヒ紙幣

りも商品券のような感じで、印刷も表面のみで裏面は白紙というものであります。

乱発された紙幣には、同一金額でありながら、大きさやデザインの違うものが多種多様見られ、また、1922年12月発行の1,000マルク紙幣に10億マルク(eine Milliarde Mark)の赤のスタンプが押されているものや、ベルリンの金庫証券の1,000マルク証券に300万マルクの黒のスタンプを押すだけで、高額な紙幣に改訂して流通させ、通貨不足の需要に印刷が追いつかなかった苦悩が見られます。

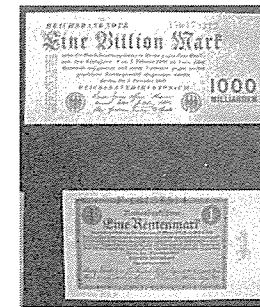
一方、各地の自治体で発行した緊急貨幣類は、乱発された紙幣よりかなり小型ですが、こちらは、一見して紙幣とは思えないくらい色彩豊かで、7~8色も使われているものや、デザインも有名人の肖像や歴史的事件、代表的な建物などバラエティに富んでおり、それが、絵画的、版画的、マンガチックにと描かれ、非常に面白く美術的な興味をわくものです。

3 ドイツ超インフレーションについて

第一次世界大戦後、帝政が倒れて共和制となったドイツは、ヴェルサイユ条約を承認し、1921年のロンドン会議で1,320億マルクという当時としては天文学的な巨額な賠償金支払いの義務を負うことになりました。

ドイツは、国債を乱発しこれをライヒスバンク(Reichsbank)に請け負わせ、これによりライヒスバンク紙幣が大量に流出することになり、ドイツは超インフレ状態に陥ることになりました。

具体的なインフレ状況を為替相場で見た場合、戦前の1ドル=4.2マルクという正常なレートと



▲上 1兆ライヒスマルク
下 1 Rentenマルク

比べると、マルクの価値は1兆分の1まで下落し、マルク紙幣は紙くず同然となり、この超インフレが急速に進んだため、1兆、10兆、ついには100兆マルクという天文学的な額面の紙幣を発行させる結果となったわけです。

(=1ドル(US))

1914年7月	4.2マルク
1919年7月	14.0マルク
1922年7月	493.2マルク
1923年1月	17,972.0マルク
1923年7月	353,412.0マルク
1923年8月	4,620,455.0マルク
1923年9月	98,860,000.0マルク
1923年10月	25,260,208,000.0マルク
1923年11月	4,200,000,000,000.0マルク

(G.Stolper:『現代ドイツ経済史』竹内書店 1969)

この危機的な状況は、シュトレゼマン首相によるライヒスバンクの廃止と、1923年10月のRentenbank(Rentenbank)設立、1兆マルク(ライヒスマルク)を1マルク(Rentenマルク)に換えるという天文学的なデノミネーションの実施により、奇跡的に収束に向かうことになったのです。

4 おわりに

この網羅的なコレクションは、その後財政学の権威と言われるようになった井藤半彌先生が、若き20歳代後半に直面した通貨価値の大暴落を生々しく物語る貴重な遺品であり、第一次世界大戦後におけるドイツ経済や社会的背景を知る、80年前の歴史的な遺産なのです。

また、その当時の高額ながら彩色乏しいマルクと、小額ながら色鮮やかに生き生きしたプフェニツヒとの対比が、視覚的、感覚的に直接訴える資料であり、紙幣という非図書資料でもあり、一橋大学附属図書館の中でも異色のコレクションと言えるでしょう。

(とよだ ひろあき:一橋大学附属図書館)
[NDC9:014.7 BSH:紙幣]